

久しぶりに「使徒の働き」からパウロの生涯の学びへと戻ります。三回目の伝道旅行も終盤へと入り、トロアスでの日々の後に、パウロ一行は帰り道に入ろうとしています。

### 1. エルサレムを目指し (13~16節)

①アソスに向け (13)「さて、私たちは先に船に乗り込んで、アソスに向けて出帆した。そしてアソスでパウロを船に乗せることにしていた。パウロが、自分は陸路をとるつもりで、そう決めておいたからである。」

トロアスからルカを含めた人々は船に乗ってアソスへと向かいました。一方、パウロは陸路で進むことにしていました。パウロのことですから、道々で福音を伝えたことであらうでしょう。そして、双方はアソスで落ち合い、パウロにはそこで船に乗ってもらうことにしていたのです。

②ミレトまでの道 (14~15)「こうして、パウロはアソスで私たちと落ち合い、私たちは彼を船に乗せてミテレネに着いた。そこから出帆して、翌日キヨスの沖に達し、次の日サモスに立ち寄り、その翌日ミレトに着いた。」

予定通り、海路組と陸路組はアソスで落ち合いました。そこでパウロは船に乗り、ミテレネに着いたのです。そこからさらに南に向かって、キヨスの沖から、次の日にはサモスに立ち寄り、さらに翌日にはミレトの港に着いたのです。

③五旬節の日には (16)「それはパウロが、アジアで時間を取られないようにと、エペソには寄港しないで行くことに決めていたからである。彼は、できれば五旬節の日にはエルサレムに着いていた、と旅路を急いでいたのである。」

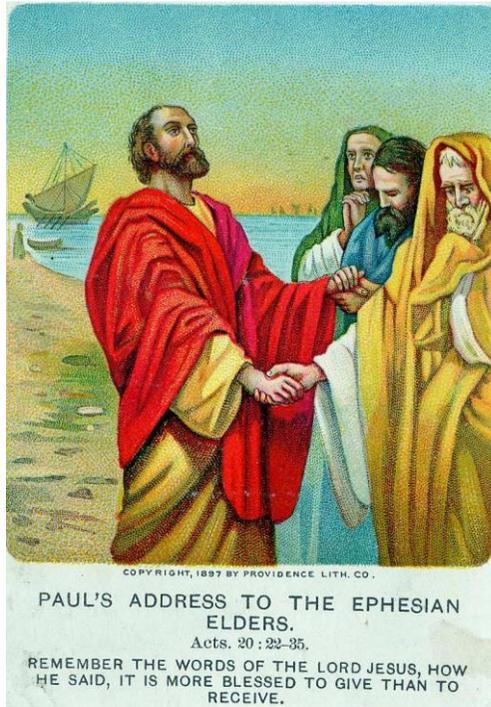
パウロはエペソに寄れば、三年もいた地ですから、それ相当の時間がとられると想定していました。そこで、エペソの地には行かないで、ミレトに直接来たのです。それと言うのも、パウロは五旬節(ペンテコステ)には、エルサレムに着いていたいと願っていたのです。エルサレム教会などでの報告や、ローマに向けての準備も必要だったからでしょう。

### 2. エペソの長老たちを呼び (4~8節)

①ミレトからエペソに使いをやり (17)「パウロは、ミレトからエペソに使いを送って、教会の長老たちを呼んだ。」

パウロはミレトから30キロほど離れたエペソまで使いを送り、エペソの長老たちを、ミレトに来るようにと呼んだのです。パウロにとっては、愛弟子たちです。

②アジアに来た日から (18)「彼らが集まって来たとき、パウロはこう言った。『皆さんは、私がアジアに足を踏み入れた最初の日から、



私がいつもどんなふうにあなたがたと過ごして来たか、よくご存じです。」

エペソの長老達は取る物もとらずに駆け付けました。すると、パウロは早速彼らに語り始めたのです。第二回伝道旅行で伝道旅行でエペソに約3年間、宣教活動をした時のことを語りだします。「皆さん。私がアジアの地であるエペソにやって来た日から、どのような日々を過ごして来たかは、語る必要もないほどですね。」

③涙をもって (19)「私は謙遜の限りを尽くし、涙をもって、またユダヤ人の陰謀によりわが身にふりかかる数々の試練の中で、主に仕えました。」

パウロは自分の宣教生活の姿勢を伝えました。それは、まず謙遜でした。そして涙を流しながらの宣教の日々であったこと。さらにはユダヤ人が様々なかたちで迫害を繰り返してきたこと。そんななかでも、主に仕えてきたということも伝えました。

### 3. エペソの長老たちへのメッセージ (9～12節)

①役立つ事 (20)「益になることは、少しもためらわず、あなたがたに知らせました。人々の前でも家々でも、あなたがたを教え、

霊的なことについても、実際的なことについても、約に立つことについては、一つとて残すことなく、公衆の面前であろうと、あちらこちらの家であろうと、エペソの長老たちや信徒たちに教えてきたと、伝えたのでした。

②悔い改めと信仰を (21)「ユダヤ人にもギリシャ人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰とをはっきりと主張したのです。」

また、パウロが強調したのは悔い改めと、主なるイエスに対する信仰でした。それは、ユダヤ人であれギリシャ人であれ関係なく、悔い改めについては、人間に対してではなく、神に対してなされるべきであることも伝えたのでした。

③促されて (22)「いま私は、心を縛られて、エルサレムに上る途中です。そこで私にどんなことが起こるのかわかりません。」

そして、エペソの人々には、特になぜここに来てもらっているのか、また、これからパウロがどうしようとしているのかを伝えねばなりません。すなわち、彼が今、エルサレムを目指しているのは、「心を縛られて」とありますが、2017年版では「御霊に縛られて」とあり、新共同訳では「霊に促されて」とあります。原文でもプニューマティ(霊)という言葉がありますから、御霊に促されて、彼がエルサレムに向かっていたことは確かでしょう。ただ、彼はエルサレムに行くとしても、そこにおいてどんな難しい事態、迫害などが起こるかどうかわからないのだと、彼らの祈りを求めていると言って良いでしょう。

《結論》 パウロからエペソの長老たちへの訣別説教の冒頭のところまでを読みました。この説教と訣別の場面は、読む者の心を揺さぶります。長いですし、学ぶべきテーマもいろいろとありますので、三回に分けて読んでいきます。

今朝特に学びたいと思うのは、パウロの説教のなかにある、「私は謙遜の限りを尽くし」(19節)とある部分です。新改訳の2017年度版も聖書協会から出ている文語訳、口語訳も、このように訳していましたが、新共同訳は「自分をまったく取るに足りない者と思い」と訳しました。しかし、同じ聖書協会が2018年に出した聖書協会共同訳では元に戻っています。その面では「謙遜の限りを尽くし」が適訳ですが、新共同訳のものは理解するのにヒントを与えてくれています。「自分をまったく取るに足りない者と思い」という訳は、非常に具体的です。神の前には小さな者で、評価される価値のない者であるということも認識させる面では優れています。そのように心底思えることがあれば、謙遜の境地かもしれません。しかし、ある角度から見ると、少し自虐的な言い方ではないかとも読めてしまいます。神から造られた者はある面では恵み深き存在ですから、どんなに小さく、弱く、力がなくても、神はそこに働いてくださるという面があるということを見なくてはならないからです。そんなことが、元に戻すことになったのかもしれませんが。

それでは、「謙遜の限りを尽くし」というのは、どのような意味を含んでいるのでしょうか。パウロはとても積極的な人だったと思われます。積極性は「謙遜」のなかに入っていると思われます。「愛は積極的である」という側面からみても明らかです。かといって、しゃしゃり出るというのでは、傲慢のにおいがしてしまいます。ならばわきまえのある積極性は謙遜の要素だといって良いと思われます。そして、何と言っても謙遜には謙虚という面があると思われます。それは本質的には相手を神に造られた存在として、尊敬することでありましょう。しかし、ここもまた難しいです。媚びへつらうことは、謙遜とはいえないでしょう。

そうすると、どうしたら良いのかわからなくなってしまうかもしれません。パウロは、それらを踏まえながら究極的な謙遜を教えてくれています。それはピリピ人への手紙2章にあります。「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりすぐれた者と思いなさい。自分のことだけでなく、他の人のことも顧みなさい。あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。」と言って、キリストこそ謙遜のお手本であると言うのです。すなわち、キリストは「神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり人間と同じようになられました。」というお方です。これ以上の謙遜はないでしょう。

パウロはキリストをいつも見上げながら、キリストの謙遜から教えられつつ、宣教の働きを続けていたのでありましょう。私たちも、謙遜を旨として歩むためには、絶えずキリストの誕生、生涯、十字架、復活を覚えて進むことでありましょう。罪深く、欠けだらけであっても、悔い改めつつ進むときに、謙遜の道は開けてくるものと思われます。謙遜が備えられていきますように。

